國學院大學学術情報リポジトリ

古典和歌の解釈における文法的な誤訳について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田, 勝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000842

古典和歌の解釈における文法的な誤訳について

小田　勝

キーワード
和歌　解釈　誤訳　古典文解釈法　古典文法指導法

〇　本稿の目的

大学において、古典文法に習熟し、古典文を正確に読解する力を養成することは、国語学（日本語学）の研究者に与えられた使命の一つである。古典講読などの授業で学生に古典文の現代語訳をさせると必ず誤訳が含まれるが、その点は（稿者を含め）古典研究を専門とする者も避けられないようである。本稿は、古典研究の専門家による誤訳の実例を整理して示し、もって古典文読解にあたっての注意を喚起することを目的とするものである。

和歌は一首ずつが文章として独立しており、モデルとして示しやすいので、本稿では歌集の注釈書・解説書における誤訳をとりあげて、これをタイプ別に掲示する。[1] 和歌の本文は、原則として取り上げた注釈書・解説書掲示のままこれを示し、[2] 誤訳がある箇所には傍線を付した。

一　同音の別語との誤認

①助動詞「り」の誤認

・浪にのみひたれる松のふか緑いくしほとかはいふべかるらん（深養父集）

『深養父集・小馬命婦集全釈』に「「れ」は受け身の助動詞「る」の連用形」とし、「専ら浪にばかり浸されている」と訳すが、これは「ひたる＋り」なので、訳は「浸っている」である。

・朝日さす雪げのけぶり立ちのぼり吉野の山も見えずかすめり（大弐高遠集）

『大弐高遠集注釈』に「吉野の山は、見えずに霞んでいるようだ」とあるが、「霞む＋り」で「霞んでいる」である。

・春ながらあらましものをかぎりあれば夏来にけりと風ぞぬるめる（大弐高遠集）

の「風がなま暖かくぬるんでいるようだ」も同様（「ぬるむ＋り」）である。

②助動詞「ず」と「ぬ」の誤認

・それならぬ事もありしを忘れねといひしばかりをみみにとめけん（本院侍従集）

『本院侍従集全釈』に「忘れね」の「ね」を「否定助動詞「ず」の已然形」とし、「私がいつか、「貴下のこと、忘れられないわ！」といった事ばっかり耳にとめていたんですねえ」と訳すが、これは完了の助動詞「ぬ」の命令形である（歌末の「けむ」も無視されている。→五③）。私訳「ほかのことも色々話したのに、「もう逢わないで」と言った私の言葉だけをあなたは耳に留めただろう」。

・はらの池につららゐにけりうちむれてわたるあぎさのけさは下りゐぬ（殷富門院大輔集）

『殷富門院大輔集全釈』に「今朝は水面に下りていた」とするが、「…の…連体形」の句型であるからこの「ぬ」は「ず」の連体形で、「あぎさが今朝は水面に下りないコトヨ！」である。

・行く年の越えては過ぎぬ吉野山幾万代の泊りなるらむ（信明集）

『信明集注釈』に「行く年が、越えては過ぎる吉野山は、いったい何万回、年という旅人の宿泊の地となることだろう。」とある。「過ぎぬ」は連体修飾語としては勿論、二句切れと解しても「…の…ぬ」の句型になるから、いずれにしても打消と考えなければならない（二句切れではないだろうが）。第五句の訳「…となることだろう」も「であることだろう」である。難解な歌だが、「行く年が越えては留まる吉野山は、幾万年の（行き着く）果てなのだろう」という意でもあろうか。古今集の「年ごとにもみぢ葉流す竜田川水門や秋の泊まりなるらむ」が思い出される。

③終助詞「なむ」と助動詞の複合「なむ（ぬ＋む）」の誤認

・うき島にみなとをいかではなれなむのりかよひける舟のたよりに（相模集）

『相模集全釈』に「はなれなむ　離れたいものです。「なむ」は終助詞で希望の意を表す」とあるが、終助詞の「なむ」は「…してほしい」の意であって、「離れたい」は「はなればや」などの訳である（→四）。この「なむ」は希望の意ではなく、助動詞「ぬ＋む」で、「このみなとからどうにかして離れてしまおう」の意であろうと思う。

・思ひつつ今年は暮れぬ今宵こそ人の心の果ても知りなめ（元輔集）

『元輔集注釈（第二版）』に「大つごもりの今宵こそあなたの心の最終的な決断を知りたいものだ。」とあるが、これも同様に、「…あなたの心の最終的な決断をきっと知ってしまう（ことになるの）だろう」である。

・代りゐる塵ばかりだに偲ばなん荒れたる床の枕なりとも（和泉式部続集）〈詞書「怪しき事ありて俄かに外へ行きたるとて、常にせし枕に書きつく」〉

『和泉式部私抄』に、「男が去つたのち、男のつねにしてゐた枕にしるしたもので、代りに積るだけでも男のことを偲ばう、今は荒れた床の枕となつたが、との心持である。」とあるが、こちらは「ぬ＋む」ではなく終助詞の「なむ」であって、「私のことを偲んでほしい」である。

④終助詞「ばや」と助詞の複合「ば＋や」の誤認

・盃を天の河にも流せばや空さへ今日は花に醉ふらむ（和歌題林抄）

『古典和歌の文学空間』に、「曲水宴で上流から流れてくる盃を、天の川でも流せたらいいのになあ」とするが、これは「流さばや」の訳であって、「盃を天の河にも流したので、空までも今日は花に醉っているのではないだろうか」である。[3]

⑤終助詞「てしか」と助動詞の複合「てしか（つ＋き）」の誤認

・いにしへもこえみてしかば逢坂はふみたがふべき山の道かは（経衡集）

『経衡集全釈』に「昔も（今も）越えてみたいので」とするが、「昔も越えてみたので」である。

なお、大学入試問題で語の識別として頻出であるものに、「に」の識別があるが、「に」の識別に起因する誤訳はあまりないようにみえ

る。とすれば、「に」の識別を強調することは、まさに〝文法のための文法〟であって、読解にはあまり活きてこない事項であるといえるかもしれない。

二　動詞の誤認

①活用型の誤認

・色にあけるとししなければ桜花今日ひぐらしにをりてこそみれ（兼盛集）

『兼盛集注釈』に「美しい色彩を持った花が咲くことによって明ける年などありませんので」とするが、意味不明な上、それなら本文は「あくる」でなければならない。これは「飽ける（飽く＋り）」で、「桜の花の美しさを堪能しきった年などないので」の意である。(4)

②動詞の自他の誤認

・夕されば蛍よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき（古今集）

ちくま学芸文庫に「光が見えないので、あの人は平然としているのか」とあるが、「（あの人は私の恋の炎を）見ないので」である。「見えない」と「見ない」との差は案外大きい。

三　「未然形＋ば」「已然形＋ば」の誤認

①「未然形＋ば」を確定条件と誤認

・みちたゆることやうからん降雪をあはれとみてもひとのまたれば（風葉和歌集）

『風葉和歌集新注』に「やはり共に解してくれる人が訪ねてくれることが待たれるので」とするが（岩波文庫『王朝物語秀歌選』も「人が待たれるので」と解する）、これは「未然形＋ば」で、仮定条件であるから、「降る雪は趣深い（と見る）けれど、訪う人が自然待たれるとするならば、道が雪で埋もれることはつらいことではないだろうか」といっているのである。

②「已然形＋ば」を仮定条件と誤認

・いまはうへにひかりもあらじもち月とかぎるになればひときはのそら（新勅撰集）〈詞書「金剛界の五部をよみ侍りける、仏部」〉

『新勅撰和歌集全釈』に「もうこの上に光もあるまい。望月ときわまれば一際の空であることよ」とするが、これは「已然形＋ば」で、確定条件であるから、和歌文学大系に「今以上にすばらしい光もあるまい。満月という極限になるので一際明るいこの空は」（傍点引用者）とする通りである。

四　「…たい」と「…てほしい」の混同

①「なむ」（「…てほしい」）を、「…たい」と誤訳

・すぎすぎていくらばかりかすぎてゆくあまねきかどのしるしきかなん（赤染衛門集）

『赤染衛門集全釈』に「聞きたいものでございます」とするが、「隅々まで行き渡っているしるしの（＝霊験を約束する）杉よ、（私の願いを）聞いてほしい」である。

・秋の野は花の錦をもろともに立ちとまりつつ見てをゆかなむ（元輔集）

『元輔集注釈（第二版）』に、「秋の野原は花の錦で一杯で、その錦を裁つように私どもも花見逍遙の人たちといっしょに立ち止まりながら見て行きましょうよ（先を急ぐ旅ではあるけれど）。」とあるが、「私たちが花見逍遙の人たちと共に見て行く」のではなく、「花見逍遙の人たちが私たちと共に見て行ってほしい」である。

・あげまきに長き契りをむすびこめおなじ所によりもあはなむ（源氏物語・総角）

歌集ではないが、あげる。『新編日本古典文学全集』に、「あなたと私とはいつまでもいっしょにいたいものです」とするが、「この総角（あげまき）に私との長い契りを結びこめて、（この総角の糸のように）あなたは私と同じ所で逢ってほしい」である。

②「しか（／にしか（な）／てしか（な））」（「…たい」）を、「…てほしい」と誤訳

・都にてさいはひくれば朝日山西ざまにとくのぼりにしかな（相模集）

『相模集全釈』に「都に幸福が行くので、幸福と共に来る朝日は、朝日山のある西の地に、早く昇ってほしいものです」とするが、「都に幸福が行くので、朝日が山に昇るように、私も朝日山のある西の方の都の地に、早く上りたい」である。

・ことさらに恨むともなしこのごろの寝覚ばかりは知らせてしかな（小大君集）

『小大君集注釈』に「格別にあなたを恨んでいるというのではありませんが、夜半目を覚まし悶々としているとだけは知らせてほしい」とするが、「知らせたい」である。

五　推量の助動詞の誤訳

①現在推量の無視

・三笠山雪やつむらんと思ふまに心のそらに通ひぬるかな（御堂関白集）

『御堂関白集全釈』に「雪が降り積むであろう」とするが、「今ごろ雪が降り積っているのではないだろうか」である。[5]

②現在推量の「らむ」を過去推量に誤訳

・年を経て垂水の水のうれしくや同じ流れの影を見るらむ（四条宮下野集）

『四条宮下野集全釈』に「同じ一族の姿を見てさぞうれしかったことでしょう。」とするが、「嬉しく同じ血筋の姿を見ているのではないだろうか」である。

・ふりかゝるしづくにはなやたぐふらんうしろめたなきよはのあめかな（堀河院百首）

『堀河院百首全釈』に「降りかゝる雨の滴と花は一緒に散ったのだろうか。とても気がかりな夜半の雨のことよ」とするが、「散っているのではないだろうか」である。

③過去推量の無視

・あま人ののりわたしけむしるしにや岩屋にあとをとどめ置きけむ（公任集）

『公任集全釈』に「海人たちが舟に乗って仏の教えをもたらしてくれたしるしであろうか、岩屋には仏の姿が明らかにとどめられて

いることです」とするが、「海人たちが舟に乗って仏の教えをこの地にもたらしたというそのしるしとして、岩屋に仏像をとどめ置いたのだろうか」である。

・あはぢしまあはれと見てやその神にあまくだりましあともたれけむ（橘為仲朝臣集）

『橘為仲朝臣集全釈』に「ずっと此地に鎮座ましまして、お守り下さっておられるのでございましょう」とするが、「淡路島をあわれと見て、その神が降臨なさり、（この淡路島に）跡を示したのだろうか」である。

・有漏の身は草葉にかゝるつゆなるをやがてはちすにやどらざりけむ（新勅撰集）

『新勅撰和歌集全釈』に「有漏の身は草葉にかかる露であるのに、そっくりそのままに蓮に宿らなかったことよ」とするが、「（煩悩を解脱できない）有漏の（我が）身は草葉にかかる露（のようにはかないもの）なのに、（まだ俗世に生き永らえているのだから、その露は）直ちに蓮の上に宿らなかった（極楽往生しなかった）のだろう」である。

④推定伝聞の「なり」を断定と誤認

・さか木ばや時はのえだにゆふしでゝこゝろとけてもあそぶなるかな（堀河百首）

『堀河院百首全釈（下）』に「心をうち解けて神楽を舞うことだなあ」とするが（和歌文学大系も同様）、助動詞の下接しない連体形の「なり」は推定・伝聞と考えられるから、[6]「…神楽を舞うようだなあ」である。

六　時の助動詞の誤訳

①「き」

・しづえにて声を惜しみしうぐひすは花のさかりを待つにぞありける（公任集）

『公任集全釈』に「梅の下枝で声を惜しみながら鳴いている鶯は」とするが、「下枝で声を惜しんで鳴かなかった鶯は」である。中古の「き」が「発話当日中の過去を表さない」[7]ということの無理解から起こる誤訳も多い。例えば、

・春の野に若菜摘まむと来しものを散りかふ花に道はまどひぬ（古今集）

角川文庫（新版）に「春の野に若菜を摘もうとやってきたのに、散りまがう花に道がわからなくなってしまった」とあるが、「（以前、初春の頃）春の野に若菜を摘もうと思って来たことがあるが、（満開の桜が散る季節になった今は）散り乱れる花に心も乱れて道に迷ってしまった」である。同様に、

・背子が来て臥ししかたはら寒き夜は我が手枕（たまくら）を我ぞして寝る（和泉式部集）

岩波文庫脚注に「臥した男の側の意」、「独り寝同様の肌寒さ」というが、以前男が来て臥していたその傍らに、今は独り寝しているのである。

②確述

・心ぼそくおぼえけるころ、すこしへだゝりぬべき人に」（風葉和歌集・詞書）

『風葉和歌集新注』に「少し心が離れてしまったようである人に」とあるが、「きっと心が少し離れてしまいそうな人に」とすべきであろう。

七　疑問文の無視

・山寒み雪まづ積もる宿のうへを白雲そふるすみかとや見る（公任集）

『公任集全釈』に「山が寒いので雪が降り積もる宿のあたりを私はふもとから眺めながら、それと知らずに白雲がかかっている住まいと思っていました」とあるが、「（あなたは）住まいと見るのか」である。

・高砂の峰の松とや世の中をまもる人とや我はなりなん（貫之集）

『貫之集全釈』に「世間を見守り続ける人と私はなってしまうにちがいない」とあるが、「…人と私はなってしまうのだろうか」である。

・たが里にいかに忍ぶぞほととぎすおのが垣根は花や散りにし（実方集）

『実方集注釈』に「私の所の垣根は、お前が来る前に卯の花が散ってしまったよ」とあるが、「自分（＝ほととぎす）の垣根は卯の花が散ってしまったのか」である。

・みちたゆることやうからん降雪をあはれとみてもひとのまたれば（風葉和歌集）

『風葉和歌集新注』に「道が絶えることはつらいことであるよ」とする。この歌の正解は三①に既に示した。推量形に訳すだけで、問いを訳出しない誤りも多くみられる。

・今年はや明日にあけなむあしひきの山に霞は立てりとや見む（元輔集）

『元輔集注釈（第二版）』に「山にも霞が立ったと見えることだろう」とあるが、「…山に霞が立っていると見るだろうか」とありたい。

・あさまだきゆきふりしけるひろまへにあとふみつけば神やいさめん（広田社歌合）

「神が多分お止めになるであろう」（『広田社歌合全釈』）も同様に、「神が禁止するだろうか」である。

八　係り結び構文の誤認

①「ぞ」の結びの連体形を連体修飾語と誤認

・あは雪の跡にぞしるき小松ばらたがねのひをかけさいそぐらむ（沙弥蓮瑜集）

『沙弥蓮瑜集全釈』に「春の淡雪の降り積んだ跡にもはっきりとしている緑の小松原では、…」とするが、この歌は二句切れである。以下の例、同様に「ぞ…連体形」で切れる。

・水のおもにかげぞうつれる菊の花色の深さをみするなるべし（大弐高遠集）

「水面にその花影が映じている菊の花は」（『大弐高遠集注釈』）

・すまのうらにしほやくあまのけぶりかとみぞまがへつるをのゝすみがま（堀河百首）

「見違えてしまう小野の炭竈の煙であることだ」（『堀河院百首全釈』）

・里なれて今ぞなくなるほととぎす五月を人は待つべかりけり（続後撰集）

「里になれて、もう今は、盛んに鳴いているほととぎすよ」（『続後撰和歌集全注釈』）

②「や」の結びの連体形を連体修飾語と誤認

・逢坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や恋しき音のみなくらむ（古今集）

角川文庫新版（高田祐彦訳注）に「逢坂にいる木綿つけ鳥も私と同じように人が恋しくて声をあげて鳴いてばかりいるのだろうか」とするが、この歌は四句切れである。「人や恋しき音」というような名詞句は構成されないだろう。

③「こそ」の結びの已然形を命令形と誤認

・みづもこぬよしのの山のなかなれどたえぬいもせはたきをこそしれ（匡衡集）

『匡衡集全釈』に「吉野川の滝のように烈しいものだと、知ってほしい」とするが、この「しれ」は已然形であって、「…知っている」である。

・住む人の匂ひそふらん菊の花またうつろはん事をこそ思へ（公任集）

「再び色が美しく変わることを想像してほしい。」（『公任集注釈』）も同様である。

④「こそ…め」を反語と誤認

・秋にあへずさこそはくずの色づかめあなうらめしの風のけしきや（基俊集）

『基俊集全釈』に「秋の季節にはかなわないで、いくら神域だからといって、葛の葉が色を変えないことが有るのだろうか」とするが、「秋に堪えきれずそのように葛の葉が色づくのだろう」である。

⑤係助詞の終助詞用法を、係りと誤認

・春はまづ東路よりぞ若草の言の葉伝てよ武蔵野の風（古今和歌六帖）

『続・古典和歌の時空間』に「春が到来したならば、真っ先に東路から、若草の便りを、武蔵野を吹く風に乗せて、ここ都まで送っておくれ」とするが、この歌は二句切れである。

九　引用句の範囲の誤認

・秋の野に妻なき鹿の年を経てなぞわが恋のかひよとぞ鳴く（古今集）

『古今和歌集全評釈』（片桐洋一）に「どうして「我が恋の効よ」と言って鳴いているのであろうか」とするが、そうすると、「鳴く」に「なぞ」と「かひよとぞ」との二つが係ることになる。二つの係りの「ぞ」が一つの述語に同時に係ることは極めて違例だから[8]、出来ればそのような解釈は避けるべきである。これはちくま学芸文庫が「「どうしたことか、私の恋のかいはこんなものか」と鳴いている」とする通りであろう。

十　古典語特有語法についての配慮不足

①「遅く…」

・「菊の花をかしきところあり」とていぬる人の、おそうかへるにいひやる　きくにだに心はうつる花の色を見にゆく人はかへりしもせじ（赤染衛門集）

『赤染衛門集全釈』に「遅く帰ってきたので」とあるが、「帰って来なかったので」である。「遅く…」は「（その時間になっても）…しない」の意で[9]、歌でも「かへりしもせじ」と歌われている。

②補助動詞「あり」の解釈

・百千鳥鳴く時はあれど君をのみ恋ふる心はいつとさだめず（貫之集）

『貫之集全釈』に「時は決まっていないが」とあるが、「時は決まっているが」である（この句型は、「百千鳥鳴く時は［イツトサダメテ］あれど、君をのみ恋ふる心はいつとさだめず」という構造である）。

③ミ語法の解釈

・春ふかみ深山がくれの花なしといふに付けてもわきぞかねつる（公任集）〈詞書「梨の花に時過ぎたる実のつきたるに」〉

『公任集注釈』に「春が深まってきたのに」と訳すが（新日本古典文学大系『平安私家集』、和歌文学大系『中古歌仙集（一）』も同様）、ミ語法を逆接に解釈できるかどうか。ここは通常に「春が深いので」と解し、「春ふかみ」は「わきぞかねつる」に係ると考えたいが、いかがだろう。

十一　おわりに

以上のような専門家による誤訳は、我々が古典文を読解するときにどのような箇所に誤訳が生じるか、その具体的な事例となっている。特に注意される点を整理して示せば、次のようである。

①助動詞「り」の誤認、②「ぬ」の完了／打消の誤認、③下二段活用動詞の誤認、④動詞の自他の誤認、⑤「ば」の確定／仮定の誤認、⑥「なむ／ばや」の混同、⑦推量の助動詞、時の助動詞、疑問文の無視、⑧係り結び構文の誤認

すなわち、右のような諸点が古典文解釈上の要注意箇所であるということであって、学生に古典文解釈の力を付けるためには、特にこのような点を集中的に特訓してゆくと効果的であろう、ということになるのである。[10]

なお、以上に示したような明らかな誤訳のほかに、和歌の解釈においては、その基本的な姿勢として次のような問題があるように思われるので、最後に一言付言する。

①原文の表現の改変

例えば次のようなものである。

・うさ増るわが身も知らでよそにのみ聞きし昔に返してしかな（信明集）

『信明集注釈』に「日に日に我が身を嫌悪するこのような事態を全く知らず、（あなたの噂も自分に）無関係な人と聞いていた昔に、戻れるものなら戻りたい。」とある。歌意はこれで正しいのだが、原文は「昔に（時を）戻したい」といっているわけで、原文の表現をどうして変更して解釈しなければならないのだろう。

②饒舌な解釈

例えば次のようなものである。

・たづね見るつらき心の奥の海よしほひの潟の言ふかひもなし（新古今集）

新日本古典文学大系に「それでももしやと思って探ってみるあの人のつれない心の奥よ」とあって、原文にない波線部を書き足しているのだが、どうしてそんなことをするのだろう。波線部はない方がかえって深みのある歌意が担保されると思うのだが。

一体、古典和歌の解釈には、①②のような解釈のしかたが大変多いのだが、このような解釈は、「何のために」「誰のために」なされているのだろうという疑問が湧かざるを得ない。対象とする古典和歌が、どのように表現されているかを、忠実に理解することこそが、解釈の基本なのではないだろうか。[11]

注

（1）本稿は、筆者が構想している「短文誤訳訂正による古文解釈の指導法」の開発のための基礎資料たるべく、前稿（拙稿「「私家集全釈叢書」を読む―古典文法研究の立場から―」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』三四号、二〇一五年）に指摘した誤訳例に、新たに誤訳例を六割ほど増補して、これをタイプ別に整理し直したものである。したがって、本稿にあげる誤訳例には、前稿に指摘したものも多く含まれていることをお断りする。なお本稿では自立語の意味に関する誤訳については触れない（一例をあげれば、「朝夕に伝ふ板田の橋なればけたさへ朽てたぢろぎにけり」（堀河院百首）を和歌文学大系に「橋桁さえ朽ちて渡るのをたじろいでしまった」とするなど（『堀河院百首全釈』も同様の訳）。『日本国語大辞典［第二版］』をみれば容易にわかるように、現代語と同意の「たじろぐ」は室町末期・近世初頭以降のものであって、この「たぢろぐ」は「衰えて傾く」の意である。容易にわかるのだから『日本国語大辞典』くらいは参照してほしいと思う）。ごく一部であるが、詞書の誤訳例もあげた。

（2）ごく少数、誤写であることが明瞭な箇所を訂して示したところがある。

（3）「右のaの型（引用者注、「―ヤ―ム（ラム・ケム）」の型）については、ヤを単に「…か」と訳す場合（確信度の低い場合）と、「…ないか」と訳す場合（確信度の高い場合）との二通りの場合がある、と考へてみる必要があるやうに思はれる。」（岡崎正継『国語助詞論攷』一九九六年、おうふう）に従い、「…や…む・らむ・けむ」を「…ないか」の形で訳したところがある。

（4）古典文において「―e・―eる」と活用する動詞が（「蹴る」を除いて）存在しない、という認識はたいへん重要である。稿者は、古典文法教育の最初期にあって、特に「下二段活用」に習熟させることがたいへん重要であると考えている（下二段活用は、現代語にない活用形式であり、所属語が多く、「得」「経」のような語幹が一音節の重要語があり、助動詞「る・らる・す・さす・しむ・つ」の活用型であり、四段―こちらは現代語にあるから理解は容易である―と自他の対になることがある）。

（5）ただし、和歌においては「らむ」が「む」の意で用いられることも多い。糸井通浩「助動詞の複合「ならむ」「なるらむ」―散文体と韻文体と―」（『国語語

彙史の研究』一一、一九九〇年）参照。

（6）北原保雄「「なり」の構造的意味」『国語学』六八、一九六七年、など。

（7）拙著『実例詳解古典文法総覧』（二〇一五年、和泉書院）一二六～一二七頁参照。

（8）拙稿「二重の係り」『岐阜聖徳学園大学紀要』三八、一九九九年

（9）岡崎正継「「御導師遅く参りければ」の解釈をめぐって」『今泉博士古稀記念国語学論叢』一九七三年

（10）したがって、これらが大学入試等の文法問題で頻出の事項であるのも、故なしとしないのである。

（11）散文の場合、原文にはない句読点を付さなければならないから、強制的に文の構造を考えざるを得ないが、和歌は句読点を打つ習慣がないので、文構造を理解することに目が行きにくい、ということもあるのではないかと思う。実際に句読点を打たなくても、

・君がため春の野に出でて若菜摘む我が衣手に、雪は降りつつ。

・君がため春の野に出でて、若菜摘む我が衣手に、雪は降りつつ。

・君がため春の野に出でて若菜摘む。我が衣手に雪は降りつつ。

のように、一度句読点を打ってみて、解釈を考えようとするのは、大切な姿勢であろうと思う。